

「惜しみなき愛」

ヨハネによる福音書 12:1-8

先週は、ヨハネによる福音書 11 章を通して、「ラザロの復活」の記事を学びました。エルサレムの近くにあるベタニアという村に、マルタとマリアという姉妹とラザロという仲の良い兄弟がいたわけですが、弟のラザロが重い病にかかり、急いでイエスさまのもとに人を遣わしたのですが、イエスさまが来られたときには、ラザロはすでに亡くなって墓に葬られ、すでに 4 日も経ってからでした。姉のマルタも妹のマリアも、イエスさまを見るなり、「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と、全く同じ言葉で深い悲しみを打ち明けました。

姉のマルタは、その悲しみの中で、「しかし、あなたが神にお願いすることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」と、イエスさまへの信頼を言い表し、イエスさまから「あなたの兄弟は復活する」との約束を頂きました。さらにイエスさまから、「わたしは復活であり命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。…このことを信じるか」と問われ、マルタは「はい、主よ」と、はっきりとイエスを神の子、メシアと信じる信仰を告白したのです。

これに対して妹のマリアの場合、最初は家に閉じこもっていましたが、イエスを見るなり足もとにひれ伏して、「主よ、もしここにいてくださったら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と、一層激しく泣き続けたのです。それは、イエスさまを愛し、信頼していたからこそその涙でした。

マルタもマリアも同じようにイエスさまを慕い、信じておりました。しかしその二人のイエスさまに対する関わり方には、大きな違いがありました。それは、姉と妹という立場や性格の違いによるものかもしれませんが、マルタの場合、極めて冷静で知性的・理性的であるのに対して、マリアの場合は、情緒的・感情的な面が強かったと思います。

信仰は、たしかに口で「イエスは主である」と告白し、心で信じる信仰によって義とされ、救われるものですが、言葉にならない態度や行為において、その信仰を表す場合もあるのです。イエスさまはマルタの信仰の告白に応え、マリアの激しく泣く姿に心を震わせ、ご自身も「涙を流され」(35 節)、激しい「憤り」をもって、ラザロの墓に立ち向かわれたのです。ラザロの復活は、「わたしは復活であり、命である」と言われた、主イエス・キリストの「死に対する勝利」(I コリント 15:57)のしるしですが、その背後に、このようなマルタの信仰と、マリアの主イエスに対する信頼と弟ラザロに対する愛の涙が関わっていたのです。

さて、今日のヨハネ福音書 12 章 1 節以下の記事は、その「ラザロの復活」ののち、主イエスが再びベタニアの村を訪ねた時のことです。この記事に入る前に、「ラザロの復活」の出来事が、当時の人々にどんなに大きな反響を与えたかを見てみたいと思います。今日の箇所のおすぐ前、11 章 45 節以下には、「イエスを殺す計画」と見出しがつけられ、イエスさまのなさったことを目撃した多くのユダヤ人たちがイエスを信じた半面、祭司長たちとファリサイ派の人々が最高法院を招集して「イエスを殺そうとたくらんだ」(55 節)ことが記されています。放っておくと、皆がイエスを信じるようになり、ローマ政府も黙ってはいないだろうという理由からです。そしてさらに、今日の箇所のお直後、12 章 9 節以下には、「ラザロに対する陰謀」という見出しで、「祭司長たちはラザロをも殺そうと謀った」(10 節)ということが記されています。イエスの人気に対する妬みからです。いつの時代も権力の座にある者は、自分たちの利益だけを追い求め、不都合な証拠は隠蔽したり、削除したり、改ざんしたりして消してしまおうとするわけですが、そのような理由から、ラザロの命まで抹消しようとする陰謀が図られたのです。

そのような暗い記事に挟まれて、今日のこの記事が記されているわけです。今日のこの記事は、「ベタニアで香油が注がれる」と見出しが付けられているように、ベタニアの村に寄られたイエスさまの足に、高価な香油が注がれて、かぐわしい香油の香りが家一杯に広がったという、暗闇の中に一筋の光を見るような記事です。

イエスさまとその弟子たちを迎え入れたその家は、おそらく、いつもイエスさまが立ち寄っていたマルタとマリアとその兄弟ラザロの住んでいた家でしょう。夕食の用意が整えられ、イエスによって甦らされたラザロもそこに居て、イエスさまと共に食卓に着いており、姉のマルタは今回も「給仕をしていた」とあります。

ルカによる福音書の 10 章 38 節以下にも、イエスさまがこの家を訪ねられた時のことがくわしく記されています。そこには、食事の接待で忙しく立ち働くマルタの姿と、イエスさまの足もとに座って、イエスさまのみ言葉に聞き入っていたマリアの姿が印象深く描かれています。マリアが忙しさに取り乱して、「主よ、わたしの妹は、わたしだけにもてなしをさせていますが、なんともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」と言い、イエスさまから「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけだ。マリアはその良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」とたしなめられたという記事です。これは、礼拝か奉仕か、どちらが大事かということを問題としているのではありません。イエスさまは、マルタのよく働く奉仕に感謝しつつ、忙しさの中で心を取り乱し、愛すべき妹を裁き中傷するマルタに、奉仕も大事だけれども、自分を見失い、取

り乱してはいけないよ。まずみ言葉に聴き、そのみ言葉に生かされ、喜びをもって奉仕することの大切さを教え示した記事です。

今日の場合でも、姉のマルタは甲斐甲斐しく食事の世話をし、給仕をしています。けれども彼女は以前のように、取り乱したり、いらいらしている様子はありません。喜んでイエスさまとみんなのために働いているのです。

一方、マリアはどうしたかという、「純粹で非常に高価なナルドの香油 1 リトラ(約 327g)持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪の毛でその足をぬぐった」(3 節)というのです。「ナルドの香油」とは、ヒマラヤ原産のおみなえし科の植物の根から取られた香油だそうですが、大変高価なものであったようです。もしかしたら、自分の嫁入り道具の一つとして、大切に少しずつ貯めてしまっておいたものかも知れません。それを全部イエスさまの足に注いで、自分の髪の毛でそれを拭いたというのです。そのため、家中に香油の良い香りが漂い充満したのです。その場に居たみんなは、そのマリアの咄嗟の行為に驚くとともに、家中に満ちた香油の香りに、しばし酔いしれるような幸せな気持ちになったことでしょう。マリアのその咄嗟の行為は、弟ラザロを死から甦らせて下さった主イエスに対する心からの感謝と献身の真心のこもった献げものだったのです。そしてイエスさま自身も、その献げものを喜んで受け入れられたのです。かつて、イエスさまの足もとに座って、ただイエスさまのみ言葉を聴いているだけのマリアでしたが、いまここでは、誰も為し得なかったような、主イエスに対する奉仕をなしているのです。主に喜ばれるまことの奉仕は、主のみ言葉に聴き従うことから始まるのです。

弟のラザロが亡くなった時、ただ泣いてばかりいたマリアでしたが、死に勝利されラザロを甦らせた主の力と愛に、マリアもまた、姉のマルタと共に、「わたしは復活であり、命である」と言われた主を、心から信じ受け入れ、主に従う者となったのです。その家に充満する香油の香りは、そのような姉妹たちと実際に死から命へと甦らされた兄弟から発せられる主に対する信仰と愛の香りだったのではないのでしょうか。

余談になりますが、我が家の一番末の娘(現在ニュージーランドに在住)が誕生した時、私は妻と相談して「香愛子」(かなこ)と名付けました。それは、ここに記されているマリアのように、キリストによる愛の香りを放つようになってほしいと願ったからです。おかげで名前のように、みんなを愛し愛される子に育ってくれました。

私は、「教会」は常に信仰と愛の香りを放つ共同体でなければならない、と思っています。「わたしは復活であり命である」と言われる主イエス・キリストを共に信じ、その恵みにあずかっている共同体だからです。時代が暗く、敵意や憎しみが満ちて、暗ければ暗いほど、教会は世の光として、愛の香りを世に放つ責任があるのです。

さて、この記事は、そこで終わるのではなく、新たな議論へと展開して参ります。それは、このマリアの主イエスへの献げ物に対して、弟子の一人であるイスカリオテのユダがクレームをつけたのです。それは「なぜ、この香油を3百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」(5節)という抗議でした。「1デナリオン」は当時の労働者の1日分の賃金でした。「3百デナリオン」というとほぼ1年分の給料ということになります。300万円位にはなるのではないのでしょうか。それ位のお金があれば、どれだけ貧しい人たちに施し、飢えを満たすことが出来るだろうか。これは、全くその通りなのです。私もその場に居たら同じように思ったかもしれません。しかし理屈の上の正論が、常に正しいとは限りません。自分自身が心からそう思い、その言葉に自分の主体をかけ、責任をもつ姿勢がなければ、正論はただ相手を批判し裁くだけの虚しい言葉になってしまいます。自分の正しさを絶対化すればするほど、真実から離れてしまうことがあるものです。旧約聖書の箴言の中に「汝、義に過ぎてはならない」という言葉があります。ユダは自分の正しさに酔うことによって、自分自身の犯している不正と過ちを正当化し、純真なマリアの主への信仰と愛の行為を非難したのです。

イエスさまは、そのようなユダの正論に対して言われました。「この人(マリア)のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから」(7節)。ユダヤの習慣では、人が死んで葬られるとき、遺体に香油を塗って全身布で巻いて墓に納めることになっていました。イエスさまはマリアが献げてくれた香油を、自分の死に対する備えとして受け止められたのです。「わたしは復活であり命である」と言われた主は、私たちに永遠の命を与えるために、自らの命を犠牲とすることを決意しておられたのです。

イエスさまは、最後にこう言われました。「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない」。このイエスさまの言葉は、貧しい人々に対する奉仕は、いつでも心がけて行うべきだ。しかし、その前にまず今、為すべきことは、わたしにしっかりとつながり、十字架と復活の恵みにあずかり、その命と力にあずかることだ。それによってあなたがたは、貧しい人々、あなたの助けを必要としている隣人に、よりよく仕えることが出来るのだ、ということです。イエスさまは、ぶどうの木の話の中で、「わたしにつながっていなければ、自分では実を結ぶことが出来ない。わたしにつながっていれば豊かに実を結ぶ」(14:5)と言われました。

私たちはほんとうに無力で小さな者ですが、私たちのために主が命を捧げ、死に勝利されたことをしっかりと受け止め、その惜しみなき愛に生かされ感謝しつつ、私たちもまた共に主の家族として成長し、この世にキリストの愛の香りを放ち、貧しい人々に仕える者でありたいと願います。

アーメン